

創業二百周年記念

はつもみぢら 創業史書記



原田家酒造業の始まり

原田家の当主を墓石に記された没年や言い伝えなどによって辿ると、三木善兵衛を祖とし、原田銀左衛門→富三郎→常三郎→新蔵→新蔵→新作→三郎→耕作→茂→康宏と続いてきたと理解される。この銀左衛門については、墓石は原田屋銀左衛門と記している。銀左衛門の没年は文化九年（一八一二年）である。「はつもみぢら」の創業はその七年後の文政二年であるとされている為、原田銀左衛門の事業をついだ富三郎のとき酒造業を始めたことになる。

清酒醸造所・原田新蔵と弟

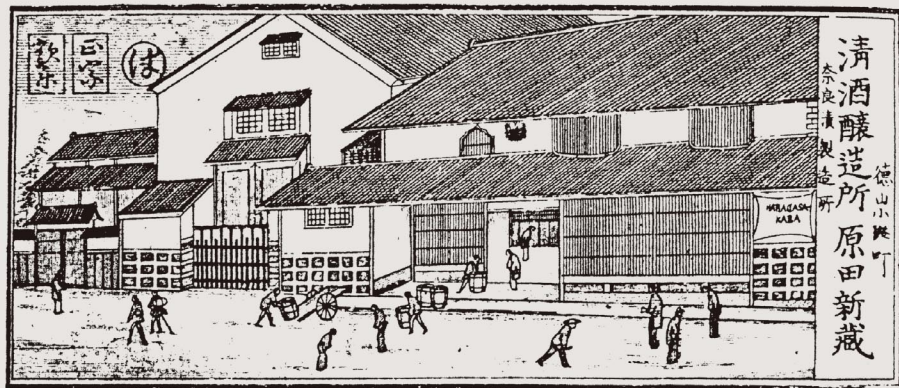
原田新蔵の弟で豊島家へ婿入りした豊島嘉兵衛だが、新蔵に劣らずいづれも明治初期の徳山で活発な経済活動をしていた。明治二〇年ころ刊行された『山口県巨商早見覧』が家屋の絵図を添えて紹介している。その絵図を転載する（資料A、B）。それぞれ「清酒醸造所原田新蔵」および「舶来物品并（ならび）唐端物商豊島嘉兵衛」と、事業内容と氏名を記した絵図である。その絵図の説明文を見ると、新蔵の醸造所は、併せて横に奈良漬製造所と小さく書き添えてある。そこには、屋号は「○」の中に「は」の字を入れたマークで示し、商品は「正宗」と「歡樂」の商標が描き込まれている。また「初紅葉」もしくは「はつもみぢら」の商標はこの絵図には見当たらない。二階建て商家造りの建物の表壁面は、その下半分のなまこ壁の上方にローマ字で「HARADASAKABA」と店の呼称を記していることから、当時の洋風舶来の風潮を受けいていた様子が伺える。

豊島家との関わり

はつもみぢ六代目の原田新蔵の弟である嘉兵衛が豊島家へ婿入りし、(当時は、縁組において男子の連れ取りがなされていたのだろう) お家を継いでからというもの、親類として永きにわたり原田家と深いつながりとなる。この後に、今度は逆に豊島家の男子が婿養子として七代目当主原田新作の三女の静子のもとへ入籍することになる。それがはつもみぢ八代目となる原田三郎であった。

毛利の殿様に好かれた新蔵

これは原田家に伝わる昔話。当時は藩主であった毛利の殿様が浜崎に出られるときは小沢町が通り道で、町人は土下座をして頭を下げてお迎えをしていた。その時、殿様は原田の前を通られるときは「新蔵はいるか」と声をかけていたのだ。



資料 A



資料 B

初代 三木善兵衛

二代 原田屋銀座衛門

三代 原田富三郎

原田屋創業

四代 原田常三郎

五代 原田新蔵

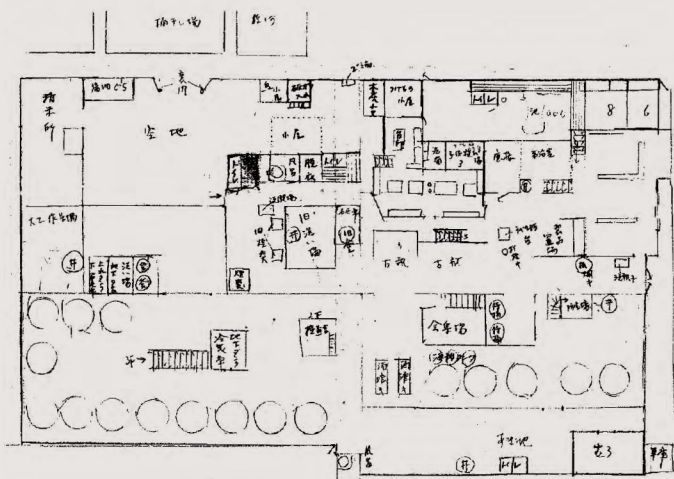
六代 原田新蔵 (次男)

原田嘉兵衛 (三男)

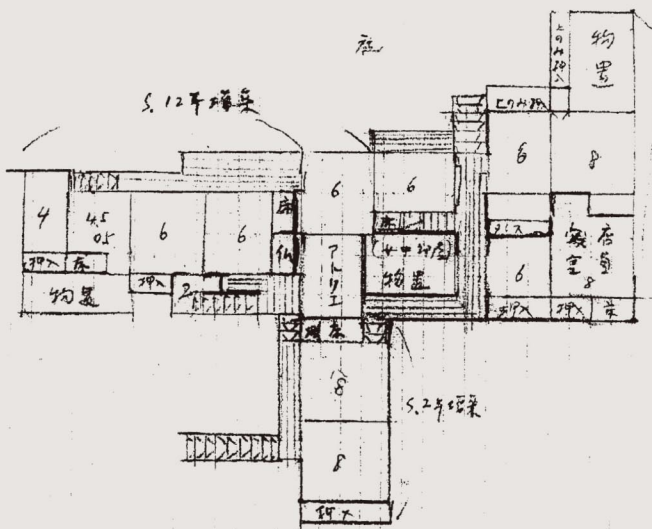
1854年
安政元年
原田嘉兵衛が豊島家へ婿入り。豊島嘉兵衛となる。

1868年
明治元年





戦前の酒造場 一階



戦前の酒造場 二階

戦前の酒造場の様子

これは八代目三郎の娘、千枝子の記録を要約しつつも文脈からの空気感を感じてもらうためあえてそのままに書き写したものである。

千本格子と白壁の二階建ての店構え、店の脇は三寸角の格子、二階の軒から大きな杉玉が吊るされて居る。之は造酒屋のシンボルマーク、明るい街から走って家に帰ると店は薄暗く、そして湿っぽい。酒の香りか、麴の匂いか、我が家の懐かしいにほいだ。店の土間の左側の台の上に四斗樽が三つ。銘柄は「初紅葉」「萬国」「歡樂」である。樽には呑み口が付けたれた拵で置った酒を客が持って来た徳利に量り売りする。一合拵、二合拵、五合拵、一升拵とあった。夕方になると近所の子供がフラスコ（燗瓶）を持って父親の晩酌を買いに来る。初紅葉でも一合十三銭だった。

売場の向うが帳場で、番頭外四、五人の店員が居て、「店の人」と呼んでいた。番頭の原田大作（同姓だが親戚ではない）と言う人は何もしないで火鉢の守をして居たような気がする。火鉢は両側に獅子頭のついた真鍮の大火鉢で大作氏はそれを抱え込んで煙草をふかしている時が多かった。

夕方店が忙しい頃近所の晩酌のお使ひが来ると私は一合拵の量り売りが面白くて、急ぎ売場の樽の前に走った。私が量るとジャブツと入れるので燗瓶の口迄満タンになって、お使いの子供と私と眼と眼でわらった。

蔵の人というのは酒造りをする蔵人のことで杜氏を頭に十三人位、これらは酒造りの始まる十一月末頃から入り三月初めまで百日位住込みで働く人である。あの頃は熊毛杜氏と呼ばれ熊毛郡あたりの農家の主人が杜氏の人柄に寄って来ていた。

酒場は今でこそホローやアルミ、ナイロンでまるで小さな化学工場であるが、あの頃の酒蔵は木と竹と藁で、それは情緒豊かなものだったと今にして懐かしく思う。小ささまざまな酒蔵独特の器具があった。狐桶なんて言うのは桶が丸くなく少々ひずんでいたと思う。竹籠の仲間も色々、そしてなくてはならない竹製品、六尺桶から小さい杓迄皆竹の籠が掛けられていた。

株式会社原田酒場創立

当時の酒の販売は樽詰めで出荷される事が多く（一升甕もあった）四升、二升、一升の樽が運び出された。一升徳利の貸し出しも多く、また夕方になると燗瓶を下げて一合、二合と量り売りのお客さんがあった。一升瓶は機械口と言って瀬戸物の栓に金具がついていて、瓶の口に差し込んでとめる方法だった。

初紅葉の商標特許出願

初紅葉の名称の商標特許出願は明治三十一年のことである。（左添付）特許庁の記録には、徳山村第八三八番地の清酒醸造業原田新作が草書体の初紅葉の文字で申請し、同年一〇月一二日付けて登録を受けたことが記されている。その清酒の商標の図柄は「楓樹ヲ交又シ其上部中間ニ草書ニテ初紅葉ト左下リニ書下シタルモノ」との説明書きがある。

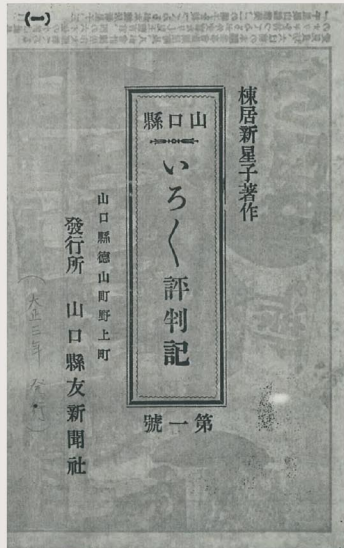


第一一五二二號
 ○出願 明治三十一年六月一日
 ○登録 同 年十月十二日
 ○品名 第三十七類 清酒
 ○要部 楓樹ヲ交又シ其上部中間ニ草書ニテ初紅葉ト左下リニ書下シタルモノ
 ○山口縣都濃郡徳山村第八三八番地 平民 清酒醸造業 原田新作

申請記録



山口県内新聞社による原田新作の人物評価



1887年
 明治二十一年
 豊島嘉兵衛ら五名が汽船問屋「共栄社」を設立。北海道から馬関、大阪、鹿児島まで航路を広げた。

豊島勝蔵

七代 原田新作

1898年
 明治三十一年
 「初紅葉」商標特許出願



豊島三郎

1918年
 大正七年
 明治二九年五月三郎は豊島勝蔵の三人目の男子として生まれる。そして大正七年九月原田新作の三女シヅコのもとに婿養子として入籍した。

1928年
 昭和三年
 株式会社原田酒場設立

原田農園

大戦後の日本は、戦時中の食糧難が続いた。米屋に行けば白米が手に入る時代ではなかった。三郎は、酒造業復興のために、まず、自営の農業と家畜の飼育によって食糧難を乗り切るよう決意した。

しかし食糧難時代に、必要な面積の水田がまとまって手に入るはずもなく、分散して購入し原田農園と呼んでいた。酒屋の敷地内にもあった。小学校の前にあった青果市場には、生産者として登録して、シーズンには毎朝、トマトやナスなどを競り場に並べた。手広く水田と畑を作っていた農家はめずらしく原田農園は徳山では特異な存在になっていた。農業は、家畜の飼育も併せて行なった。



ビールの卸売り

二十九年の終わり頃小売部ができ、最初ははつともみちと宝焼酎にビール少々を販売。焼酎はうんすけ(斗壺)に入って居るものを一升瓶に詰め替えて売っていた。ビールの売り上げが徐々に増え始める。

三十三年十一月、キャバレー美人座が開店。三十七年三月、クラブ伊豆海が開店。ビール需要に追い風の中、クラブ伊豆海に限ってはタカラビール専売のクラブとなり、これが徳山でタカラビールが売れる切っ掛けとなった。夏にはタカラビアガーデンと銘打ったイベントも行う程となる。

三十八年期決算で初めて清酒の売り上げを小売の売り上げが上回る。三十九期決算でも売り上げが増え初めて純利益が出る。こうして徐々に利益が上がって行き、タカラビールが生産終了した後もアサヒビールと特約を結び、ビール販売を続けた。



中国五県、山口県、両新酒品評会 はつともみちが最優秀賞

原田家と消防団

昭和一二、三年、連日の雨で川が増水。大成寺橋が流されそうになり、消防団員が原田家を拠点とし集合。原田家総動員で炊き出しが行う。

消防団の必死の奮闘にもかかわらず大成寺橋は流失。この頃から三郎は消防の事となると人一倍熱心であった。

太平洋戦争の中、消防団は警防団と名が変わり、副団長となった三郎は常時団服を着用して防空訓練の指導に当たる。徳山警防団は熱心な指導が評価され全国表彰を受ける。戦争が切迫して来て徳山に常備消防が出来ることとなったが団長が一人出征、三郎が団長を引き受ける。

三月十日の東京大空襲を皮切りに日本中空襲が続く中、七月二十七日徳山焼夷弾攻撃により一日夜通して消火や救助を行う。その後も幸町(現銀座二丁目)の松屋呉服店倒壊事故、小学校の放火全焼と大きな活動が続く。

その頃、市内上御弓町の海軍集会所跡に進駐軍が駐在することになり、進駐軍の要請で常備消防が必要となる。市に予算がなかった為、三郎は原田酒場の従業員と家族や近い仲間達で私設常備消防を設置した。私設消防団の出動は太華山の山火事に始まり、福川の八十数件の火災、歌舞伎座の全焼など大小含めて、多くの出動があった。

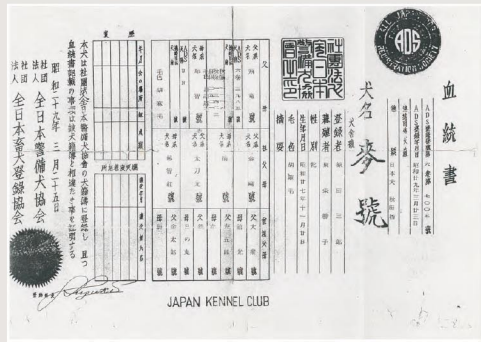
世の情勢も落ち着き、徳山市に消防署が誕生。消防車を運転して署へ運ぶのを店先で見送る。



私設消防団の引き受け

血統書付きの犬

叔父梅地の紹介で東條英機首相のお宅で飼われていた血統書付きの秋田犬を譲り受けることになった。当時(昭和二十八年)東條邸まで伺って七千円で譲り受けた。



八代 原田三郎



1945年
昭和二十年

戦時中徳山大空襲によって全焼

1953年

昭和二十八年

当時首相の東條家の愛犬を引き取る

生野酒造

金策に苦勞した折に三郎の兄である生野豊へ相談した所、生野酒造と合併する事となる。

九代 生野豊



1954年
昭和二十九年

社名改め「初紅葉酒造株式会社」
中国五県、山口県、両新酒品評会で
はつともみちが最優秀賞

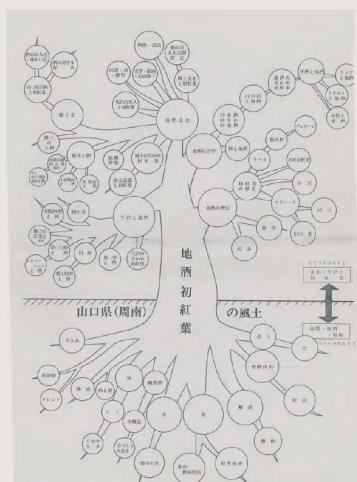
十代 原田耕作





四季醸造・造り酒屋の復活

昭和六十年に一度休止していた酒造りを復活。小さなサイズで常に新しいフレッシュなお酒を提供出来るようにする為、四季醸造のスタイルを取る。大量に在庫を抱えず、無理のない生産コストの中、より美味しいお酒の提供を大切にしている。
原料米は山口県内産の山田錦、西都の雫のみを使用。水も中国山脈の鹿野地域の伏流水を使用しており、地元ならではの良質なものにこだわる。そしてそのお米の旨みを存分に引き出したお酒を造りたいという理由から全量を純米酒として製造の再開を果たした。主力のベースラインは「原田」の名前を使い、水が流れるようなデザインになっている。



PR戦略など立てる為の資料

利き酒競技・優勝

平成十六年に行われた第五十四回中国地方五県き酒競技会において、個人部門で現当主の十二代目原田康宏が優勝を果たす。(当時専務) また、平成十九年度の同競技会においても優勝を果たす。
利き酒は日本酒造りには欠かせない能力の一つ、良いお酒を作る上で、その舌で左右される部分もあり、より正確な味の判断が出来ることされます。

創業二百年

文政二年(1819年)に創業し、ちょうど二百年の月日が流れました。これまで数多くの方々を支えられながら戦火に耐え、徳山・周南の地で生き抜いて参りました。これを一つの節目と捉え、我々の歩み巡った歴史を振り返るとともに、次の百年へ向けた道を切り開いてゆければという思いしております。

日本の「國酒」である日本酒は百薬の長と呼ばれ、人々の暮らしの中で健康と心の安らぎを提供してきました。我々「はつともみぢ」も地域社会の発展に貢献することを使命として、様々な遍歴を重ねながらも日々の研鑽を怠らないよう努めて参りました。これもひとえに「はつともみぢ」に関わり頂いておりますお一人おひとりの御心が励みとなり、一日一日を大切に過ごした結果が二百年という年月続けて来られたものと考えております。この場をかりまして日頃よりご愛顧頂いておりますお客様をはじめ、ご協力頂いております関係各位に感謝をしつつ、「はつともみぢ」一同よりお礼のご挨拶とさせていただきます。



酒米



酒米の蒸し器

1960年

三栄酒造と合併

1985年
昭和六十年

酒造を一時休止

2001年
平成十三年



十一代 原田茂

節目の二十一世紀より、十一代目原田茂となる。

2004年
平成十五年



十二代 原田康宏

周南市合併を機に社名変更
新社名株式会社はつともみぢ
当主も十二代目原田康宏となる。

2019年
令和元年
2020年
令和二年

創業二百年周年

次の百年へ

挑戦は続きます